

能煩野に逝きし人

小長谷正明

国立病院機構鈴鹿病院長

スズカと言えばサーキット、F1グランプリだ。晩秋のシーズンともなると、マシンの爆音が町中に響き渡り、シューマッハやハッキネンの名前が身近かに感じられてくる。僕も一度、赤地に紺の馬がたてがみを翻すフェラーリのキャップを被って観戦に行ったことがある。チェッカーボードのフラッグが下ろされ、凄まじい唸りと地響きを立てて、二五台ものレーシングカーが三〇〇キロのスピードで突っ走ってくる。迫力満点、まさに、血が沸き肉が躍る一瞬だ。目の前で一塵の土煙とともにコース・アウトした車から降りて、手を振っていたのは、すでに伝説のレーサーのセナだった。次のレースで、彼は爆死した。モナコをはじめ、五大陸を転戦して回るモーター・スポーツのおかげで、スズカがワールド・フェイマスなのはいうまでもない。秋空に漂うカラフルな熱気球の群れをみていると、地方の都市ながらも、世界に通じているんだという思いに浸ることもある。しかし、鈴鹿がことさらな土地なのは、F1レースだけではない。サッカーワールドカップの前はどこかのチームが事前キャンプを張ったことなどはどうでもいい。もちろん、奉職先の病院のためであるはずもないが、かつて雄叫びを上げながら日本中を駆け巡り、病院のつい目と鼻の先の道端で亡くなった三〇歳の男性のことは、多くの人々がご存知のはずだ。

その青年は山で氷雨にあい、とぼとぼと歩いているうちに、足が折れ曲がるほどくたくたになり、杖に頼りながら鈴鹿病院の前の辺りに辿り着いた時に精根も命も尽き果てたという。なにやら、神経疾患に罹っていたようで、神経内科を標榜する筆者としては強い関心を持っている。ちなみに青年の名前は小碓命(おうすのみこと)、別名を倭建命(やまとたけるのみこと)とおっしゃる。

僕が小・中学生だった昭和三十年代は、学校教育の中にもイデオロギーが持ち込まれ、古事記は史実ではなく皇国史観だ、神話教育反対という意見が声高に唱えられていた。中には天照大神を「てるだいじん」と教えていた教師もいたくらいだ。紀元節復活断固粉碎のスローガンには、せつかく休日が増えるというのにと、子ども心にうらめしかった。高天が原や倭建命のことは、三船敏郎主演の映画『日本誕生』で知った。家にはテレビがまだなく、映画は学校の指定以外をみると、不良といわれた時代だが、これは許可が出た。岩屋戸の前の天宇受売命(あめのうずめのみこと)の妖しげな踊りと、天照大神や弟橘比売(おとたちばなのひめ)がこの上なく別嬪だったのを覚えている。

古事記は高校の古文の教科書にあり、全学連崩れの国語教師は大和朝廷の覇権主義といいながら授業をした。もののあわれを解さない僕たちは、光源氏は女蕩らしと陰口をたたき、彼の何百年か前の御一族のタケル物語の方が素朴で面白かった。熊襲や蝦夷(えみし)と、文字通り東奔西走の末、病を得て力尽きて薨去し、葬られた陵から白鳥が飛び立った。その土地、能煩野という変な地名を、その時に記憶した。

それからかなりの年月が経って、今の病院に奉職することになった。スズカ・サーキットとは太い鈴鹿川を挟んだ反対側で、旧東海道の庄野の宿から小高い台地に上がり、鄙びた家並みの道から入ったところである。地名は加佐登、万葉仮名だろうが耳慣れない響きである。土地の職員に聞くと、江戸時代までは御笠殿社という倭建命が最後まで持っていた笠を祭った社があり、今は加佐登神社という。

別の日、病院の先の電器屋のあたりで、運転手が公用車のスピードを落とした。「ドクター、ここんこで倭健命が亡くなったんです。この木が宝冠塚で、冠が埋めてあるんですわ。ほれ、この地(能煩野)で崩御したと書いてあるでしょう。そこの加佐登神社の古墳が命の白鳥(しらとり)塚で、わしらの学校も白鳥中学です。後で、父親の景行天皇が弔いに来た行在所があったんで、昔はこの辺を高宮といったんですわ。嘘と思うやもしれんけど、古事記や日本書紀に書いてあるんですわ、ドクター」

そこで、久し振りに古事記や日本書紀を調べてみた。倭建命は能煩野に到りましし時、國を思ひて歌ひたまひしのちに崩(さ)りましたのだ。能煩野とは、鈴鹿山脈の南側、きわめてなだらかな広い裾野で、わずかに傾斜している登り野のことである。わが病院も、御笠殿社も白鳥塚も、その能煩野のかか

りにある。

もつとも、倭建命陵は加佐登から数キロ離れた能煩野神社にあることになっている。明治になって、その地名が辛うじて残っていた村の小さな円墳を宮内省が指定し、明治十六年に命を祭神とした神社を久邇宮が鎮座させた。そして、天皇や宮様たちがお使いを出し、権威付けをしたのである。人々の記憶がまだ風化していない大正四年の『鈴鹿郡郷土誌』に、牽強付会な話と記載されている。だから、僕はわが加佐登が倭建命終焉の地と信じている。

東国から熱田に戻った倭建命は、土地の豪族、尾張氏の娘で、彼を待ち焦がれていた美夜受比売(みやすひめ)と、月の障りもなんのそのでメイク・ラヴした。それから彼女の家に草薙の剣を置いて、「この山の神は素手で捕まえてやる」と嘯きながら伊吹山の荒ぶる神を退治に出かけた。牛のように巨大な白猪に出会い、大声で言わずもがなを言う。「白猪は神の使い走りだ。今しとめずとも、帰りに一ひねりだ」。すると、大氷雨が零(ふ)ってきて、命は打ち惑わされた。山の神そのものであった大白猪のたたりで、正気を失ったのだ。山を降りて、醒ヶ井あたりで、御心ようやく醒められた。

名古屋の冬はまさに身を切るように痛くて冷たい伊吹嵐が吹いている。風上は丸みを帯びた雪の伊吹山であり、荒ぶる神とは、きっとこの風神に違いない。倭建命が大氷雨が零られたのは、この山風の冷たいイメージからして納得できる。濃尾平野に雪をもたらずのも、伊吹山方面からの雪雲だ。

倭建命は熱田に戻るべく、関ヶ原を経て東に向かったが、二〇キロメートル強、一日行程を行くか行かないうちに、養老の滝近くで歩行困難を自覚された。「早く早く、心は飛ぶようだが、足がいうことを聞かない。たぎたぎしてきた」たぎたぎの意味ははっきりしないが、トボトボ、ビリビリ、あるいはボコボコか、いずれにしても下肢の症状のようだ。かくして、そのあたりを当芸野(たぎの)と言うようになった。

古事記によると、そこから養老山系東麓を二〇キロ南の尾津に至っている。ここは、五月五日に上げ馬神事がる多度大社の所で、当時は港だった。濃尾平野南部は、木曾川や長良川、揖斐川などの河口がつくる大湿地帯であり、ここからは海の向こうに熱田が見えたという。もちろん、命はさまざまな感慨に打たれて歌を詠んでいるが、ここでは触れない。美夜受比売の熱田をあきらめ、朝廷のある大和に帰るべく西に向かう。尾津からゆるい丘陵を越えて二〇キロ弱、四日市市の西端、采女(うねめ)の里に至った。ここで足の症状が重くなった。「吾が足は、三重に勾(まが)れるが如くして、甚だ疲れたり」この嘆きが、おそれ多くも三重県の語源となった。そして、西へほんの数キロ、わが病院のある能煩野で力尽き、「大和は国のまほろば・・・」の望郷の歌などの哀切な辞世を幾つか残している。「嬢子(おとめ)の床の辺に置きし 剣の太刀 その太刀はや」歌い竟(おわ)りて、即ち崩りましき。つまり、事切れた。古代日本随一の英雄のいまわの際の思いが、常に携えていた草薙の剣とともに、美夜受比売であったのに等身大のぬくもりを感じる。

倭建命の病気はなんだっただろう。若い頑強な男性が歩行障害を来し、数日のうちに衰弱死したのだ。古事記の記述から、病状進行の時間的プロセスが読み取れる。月の障りのセックス、草薙の剣を手離れたことや山の神の祟りなどの凶事に因ると昔の人は考えた。が、古代人も現代人も、体の構造や病因病態は変わるまい。

僕も学生時代に登山の後で下肢が脱力したことがある。鈴鹿山脈の最高峰、鎌が岳は一四〇〇メートルくらいで、高山病を起こしそうな高さだが、勾配はきつく、上は急峻な崖である。そこを若さにまかせて、大きな望遠レンズを担いで、一人で一気に登った。目に触れた花も景色も、帰りに撮影すればよいと、ズンズン進んだ。キツネもいたし、白い猪が藪の中に潜んでいたかもしれない。

ところが、頂上に近づく頃には、太股が痛くなり、最後は四つ脚で這うようにして登った。天辺で風に吹かれているうちにゾクゾクとし、もう写真などはどうでもよくなってきた。小一時間ほどして、近くのグループと一緒に下山しようかと促されて、動き始めた。きっと、憔悴して危ないと思われたに違いない。事実、両方の大腿四頭筋は鉛の塊が埋め込まれたように重くて痛かった。強い意志で一步一步を踏んで下山したが、最後は朦朧となり、そのグループの人たち達の掛け声で足を運んで、麓にたどり着いた。

下宿に戻り、体温を計ると三九度以上で、昏々と眠った。喉が乾いて起き上がろうとして、足に力が入

らず、トイレで赤いオシッコをした。数日間、体はフニャフニャと力が入らず、伊吹山の倭建命もかくなりしかと思いながら、ボーツとして過ごした。

今考えると、行軍病であった。激しい長時間の運動負荷で横紋筋が崩壊するのだ。そして筋内で酸素を蓄えるミオグロビンが血中に流れ出し、腎から排出されて黒赤尿となる。ひどいと糸球体にミオグロビンが詰まって急性腎不全となる。幸い、僕は大丈夫だった。古代のヒーローは下山後に一時回復したが、急性腎不全に陥り、衰弱していったのだろうか。もっとも、これは新兵など、体の鍛えが乏しい人になりやすい。日本中を駆け回った命は、やわな体ではなかったと思われるが……。

もう一つのシナリオはギラン・バレ症候群だ。発熱などの感冒様症状の後に手足の脱力、時には呼吸筋障害まで起こす病気だ。ウイルスや細菌感染などが契機となり、自己免疫のプロセスで末梢神経に急速に炎症が起こり、早い時は数時間で麻痺が完成する。ポレリア症のうなダニ咬症でも起こる。伊吹山でダニに刺されたか、何かのウイルスで感冒症状を発症し、高熱で意識朦朧となり、それが治った後に、短日のうちに末梢神経障害で筋肉が麻痺し、歩行困難となった。ギラン・バレ症候群では深部感覚も冒され、「吾が足は、三重に勾(まが)れるが如し」は、脱力の表現だけではなく、深部感覚障害による関節の過伸展をも表現している可能性もある。そして、呼吸筋障害あるいは電解質バランスが崩れたりして、能煩野で行き倒れのようにしてみまかった……。

日本史の本には倭建命は実在しなかったと書かれている。根拠は不明だが、大正時代の権威の説らしい。石器捏造事件のように、科学的客観性のない分野では、偉そうな人の一声が決定的な世界のようなのだ。しかし、当芸野や尾津、三重村、能煩野などと、当時でもマイナーな田舎の地名の続出にむしろリアリティを感じる。病気こそ特定できないが、亜急性の神経症状をなぞらせる経過が時系列をもった古事記の記載は、わが病院の前で逝った人物の存在を強く示唆している。

小文にピリオドした後、出されたお茶で最中を口にした。包みには『杖衝の最中』の文字と、旧東海道の采女から鈴鹿の石薬師の間の坂を倭建命が杖を衝いて越えたと、古事記由来の杖衝坂の地名譚が書かれていた。